

レトロを基軸にした地域振興へのアプローチ

—2015（平成27）年度「地理学研究」の覚え書き—

香川 貴志

（京都教育大学）

Approach to the Local Promotion with Retrospection as a Basic Concept
—A Memorandum of Field Trip in the Mojiko-Retro and Bungo-Takada—

Takashi KAGAWA

2015年11月30日受理

抄録：2002（平成14）年度の東京エクスカッション以来、筆者が担当した「地理学特講（旧称：地理学臨地実習）」と「地理学研究（旧称：地誌学臨地実習）」は、すべてその内容を当紀要にまとめてきた。そこで蓄積された経験を活用して内容の改善を図っているため、訪問先が異なっているにもかかわらず、事前学習・現地行動・事後学習の3ステップをシステムティックに進められるようになってきた。今回は最終日の早朝に台風が滞在先を直撃し、午後まで全ての公共交通機関が運休するという大きなトラブルにも遭遇したが、それをいかに克服したのかを含めて記載し、今後の糧となる貴重な経験の記録として本稿を残しておきたい。

キーワード：レトロ、地域振興、観光ボランティアガイド、門司港、豊後高田、昭和の町

I. はじめに—訪問地の決定から受講登録まで—

前年度の「地理学特講」（偶数年開講）は、阪神・淡路大震災20周年を前にして、京都からも近い神戸市と淡路市をめぐるエクスカッションを実施した（香川：2015a, 2015b, 2015c）。この授業は交通費が安く済んだことも手伝って参加学生が40名を超過したが、受講生の中には「神戸は非常に学ぶところが多かったが、せっかくなので遠方を訪問したかった」という意見が散見されたことも事実である。そこで今年度は、当初より九州北部を訪問することとし、その訪問地を2014年秋季から模索し始め、シラバスを執筆する頃には行き先が門司港レトロ地区、豊後高田「昭和の町」、別府温泉郷の3か所を巡ることに決まっていた。これらの地区について、筆者（香川）は門司港レトロ地区と別府温泉郷への訪問経験があった。しかし、豊後高田は文献で得た知識だけで訪問したことがなかった。そこで2015年3月上旬にこれら3か所の予備調査（下見）を実施した。

受講学生の募集はシラバスに記したとおりにした。すなわち、例年通りに前期開講日に予備登録用紙を研究室ドア横のクリップボードに挟んで掲出し、受講希望者に記名してもらったが、出足は例年に比べて極端に鈍かった。結局、受講希望者が溢れて調整や制限をすることもなく、最終的に14名（うち1名は現地行動を合同で行う「人文地理学特論」の受講生で教育学研究科社会科教育専修の修士課程1回生）となった。受講者の属性は、大学院修士1回生が男子1名、6回生男子が1名、3回生が男子6名・女子5名、2回生が女子1名で、学部学生は全員が社会領域専攻の所属である。

II. 事前学習会—実施方法とその内容—

本授業科目は、現地実習が2泊3日で、第1日が3コマ（6時間）、第2日が5コマ（10時間）、第3日は2コマ（4時間）から構成される。したがって、現地実習の総時間数は20時間に及ぶものの、2単位科目としては10時間が不足する。そこで、事前学習会で不足分を代替している。今年度は、第1回事前学習会を5月16日（土）に2コマ（4時間）、第2回・第3回事前学習会を7月25日（土）に3コマ（6時間）実施した。これで合計

30 時間となり、2 単位科目の基礎要件を満たした。なお、第 2 回・第 3 回を同じ日に開催したのは、土曜日を 3 度にわたって事前学習に充当すると、受講生の課外活動に支障をきたすからである。

1. 第 1 回事前学習会（5 月 16 日（土））

事前学習会を土曜日開催としたため、学生たちの週末の過ごし方に配慮して「ランチを摂ってから午前 11 時 30 分に集合して開始」と一括送信メールで告示した。事前学習会の開催時間帯は、通常の昼休みと 3 時限（厳密には 4 時限に少しかかる時間）である。

ここでは、夏季休暇中に実施する現地実習の日程（8 月 23~25 日）を再確認の後、全行程のアウトラインを説明した。受講生のうち 6 回生の男子学生が就職試験の日程との関係で 24 日朝に豊後高田で現地合流することになったが、他の受講生は門司港駅改札前に 8 月 23 日の午前 11 時に集合とした。

第 1 回事前学習会では、後日実施する第 2 回・第 3 回事前学習会に向けた説明もした。具体的には、現地実習の対象地域である門司港レトロ地区、豊後高田「昭和の町」、別府温泉郷の 3 か所についての文献研究の進め方に関する解説である。文献研究については、受講生各自に文献渉猟から始めさせると重複が生じたり、読むべき文献を探し出せない学生が出現することが経験的に分かっていたので、筆者（香川）が CiNii 等であらかじめ選り出した 60 本の文献を一覧表にして香川研究室前に掲出し、受講生が読んでみたい論文の箇所に記名して予約するというシステムを説明した。受講生は、各自で当該文献を収集し、精読を経て内容を簡潔にまとめるということになる。この詳細については次節で改めて触れる。

2. 第 2 回・第 3 回事前学習会（7 月 25 日（土））

この日の事前学習は、文献研究の成果を発表してもらうことをあらかじめ一括送信メールで再確認してから実施した。文献の中には、京都教育大学に所蔵されておらず、なおかつオープンアクセスになっていないものも多く含まれていたため、文献収集と精読のための時間を確保する観点から、第 1 回事前学習会の後に 2 か月の間隔を設けた。受講生各自に対しては、論文の分量（ページ数）によって分類した A、B、BC、C の 4 つのカテゴリーに応じて選んだ 4 本の論文それぞれについて 181 字~200 字の要旨をまとめ、各論文から 4~5 語のキーワードを探し出して添えるという課題を与えた。これらの課題のうちキーワードについては、それが冒頭に記されている論文もあるため、こうしたケースではその流用を認めた。60 本に及ぶ文献の内容については別稿（香川：2016）に譲るが、上記の 4 カテゴリーに筆者が担当する K カテゴリーを加えた分類基準は次の通りである。

A：5~8 ページ、B：9~11 ページ、BC：12 ページ、C：13~21 ページ、K（香川担当分）：5 ページ未満または 22 ページ以上または印刷中。

論文をリストアップする際、原則的に 5 ページ以上のものを抽出したが、4 ページ以下の論文で内容の濃いものがあつたため、当該論文 1 編もリストに含めた。ただし、4 ページの論文は、短さゆえに希望者が殺到することを懸念して K カテゴリーに含め筆者（香川）が担当した。また、22 ページ以上にわたる長編、さらに印刷中ながら読んでおくべき論文については、作業負担に配慮して、やはり K カテゴリーとした。

リストアップされた論文を 3 か所の現地フィールド別に概観すると、門司港レトロが 7 本（A:3 本、B:2 本、C:2 本）、豊後高田「昭和の町」が 26 本（A:18 本、B:2 本、BC:1 本、C:3 本、K:2 本）、別府温泉が 27 本（A:7 本、B:8 本、BC:2 本、C:8 本、K:2 本）、以上の 60 本となった。現地行動を合同実施とする「人文地理学特論」に登録した大学院生 1 名を含めた受講生は 14 名なので、香川が K カテゴリーを 4 本（うち 1 本が 4 ページ、3 本が 22 ページ以上）担当することにして、残りの 56 本を受講生 14 名で 4 本ずつ分担することにした。

テンプレートにまとめさせた各論文の要旨は、課外活動の関係で事前学習会の一部を欠席せざるを得なかった受講生、および現地実習のノウハウを学ぶことを科目の目標にした大学院「人文地理学特論」の受講生に集約してもらった。これを改めて微修正し、本稿の紙幅に収まりきらない各文献の書誌情報とともに既述の別稿（香川：2016）で整理した。その原稿の一部となる簡易製本版は、現地行動初日の集合時に受講生へ配布した。

第 2 回事前学習会の最後には、集合日時と場所を再確認した。また、フィールドノートを配布し、使用方法の一例を説明した。スマートフォンが普及して以来、フィールドノートを上手く活用できない者が多くなっており（香川：2015d）、初歩的な現地調査の技法を改めて教えておくことが急務だと考えたからである。なお、第 2

回事前学習会に事情があって当日出席できなかった者には、代替課題（論文要旨集の編集作業）の連絡に添えて、学習内容をEメールで連絡しておいた。

Ⅲ．現地実習の実施

この章では、現地で集合してから解散までの行動を整理する。既述の通り、今年度は2日目（8月24日）の夜半から3日目（8月25日）の未明にかけて台風が滞在先を直撃し、最終日の午後まで全ての公共交通機関が運転・運航を見合わせた。イレギュラーな展開ではあったが、それを含めて記録しておく価値は十分にある。

1. 現地実習1日目（北九州市門司区の天候：晴、日中の最高気温：30.4℃（11:40））

当日早朝に新幹線で京都駅を発てば間に合うように配慮して、集合場所と時間を「門司港駅改札前で午前11時」とした。集合時間には、変則的に翌朝からの参加となる1名を除く全員が時間どおりに集合した。集合の後、1日目の予定と門司港の簡単な説明を行って、当地区での課題を含む解散までの課題3題を与えた。受講生は団体行動と個人行動の両方で課題解決のために観察眼を研ぎ澄ませておく必要がある。

団体行動でレトロ地区（図1）へ移動し、ここでは再開発の概要と関門海峡についての解説をした。全員で入れる日陰が無かったため、一部の受講生が炎天下で説明を聞くこととなった。各自が相応にフィールドノートを活用していたので、事前学習会での説明は効果的であったようだ。門司港レトロ地区は、家族向けというよりは大人向けの観光地であるため、団体行動は早々に切り上げて、昼食時間を含む自由行動時間を設け、最初の集合場所に13時30分に戻るよう指示した。

再集合の後、門司港駅から至近の九州鉄道記念館へ徒歩で移動した。ここは少なからず鉄道ファン向けの施設ではあるが、門司港の開発史や九州の交通網整備を知るうえで外せない重要な見学ポイントである。また、夏季の現地実習では、とりわけ涼がとれる施設への訪問を組み込んで体力の温存や回復を図る必要がある。記念館に入場後、屋外の実車展示場所の日陰で記念館や九州の鉄道の概略を説明し、見学後の集合場所と時間が門司港駅改札前に15時20分であることを告げた。あとは受講生の自由見学に任せた。もともと、大半の者はグループ行動をしていた。その間、筆者は館内を巡りながら受講生の質問に答えた。今や風前の灯と化した寝台列車が本州と九州を結ぶ太いパイプであったことは、飛行機での長距離移動が当然になっている昨今の学生にとっては一種の「歴史」であるかのような反応が印象的だった。2006年の長崎で実施した現地実習（香川 2007）や2012年に秋田で集合した現地実習（香川 2013）では、多くの受講生が寝台特急で現地入りしたことを思えば、ごく短い期間に鉄道輸送が大きな転換期を迎えたことが分かる。

門司港駅での再集合には全員が遅れずに揃った。ここから普通電車で小倉駅に移動し、さらに特急電車に乗り換えて豊後高田への玄関口になっている宇佐駅に至った。宇佐駅から豊後高田までは、地域交通を理解させるために路線バスでの移動を選んだ。さいわいにも下見の際に調べておいたものより1便前のバスに乗ることができた。豊後高田バスターミナル（BT）までは約10分の行程で、その大半がかつての軽便鉄道時代の線路跡と並行した道路を走る。また、豊後高田BTは、この軽便鉄道の駅施設を流用した構造になっており、そのことを到着直後に説明し



図1 門司港レトロ展望室からみた門司港ホテル・門司港駅方面の景観
ウォーターフロントには歩行者に配慮した遊歩道が整備されているが、日陰はあまり多くない。（2015年8月23日、香川貴志撮影）

た。我われ一行は、こうして当地でも交通機関の変遷を体感することができた。

宿舍到着後に予期せぬ事態が生じた。それは蕎麦アレルギーのある男子受講生が1名いたことに起因する。その事実は事前に宿舍へも伝えていたが、当該受講生のアレルギーが予想以上に強く、1名だけ別宿舍に移動することになった。さいわいにも宿舍は1名分の料金返還に応じてくれたため、担当者（香川）が変更先の宿舍の料金を工面して当該学生は我われの滞在先から徒歩5分程度のビジネスホテルに投宿した。宿舍でのミーティングと夕食の後、香川と数名の学生でそのビジネスホテルを訪問し、当該受講生の食事に付き合い、ミーティングでの内容を伝えた。

2. 現地実習2日目（豊後高田市の天候：曇、日中の最高気温:26.8℃（11:00 ほか））

天気予報では九州地方への台風接近が報じられていたものの、午前8時に朝食を摂った時点ではまだ風も強くなく（結局はこの日の夜半前まで風は強くなかった）、2日目から参加の男子受講生1名が合流して午前9時過ぎに宿舍を出発し、「昭和ロマン蔵」に徒歩で向かった。途中、豊後高田BTに至る駅通り商店街は「昭和の町」の構成要素の一つであるため、道中でも景観に配慮したまちづくりの取り組みについて説明した。

「昭和ロマン蔵」は残存していた倉庫群を改装して博物館にした施設で、その周辺には「昭和の町」の整備や維持の中心となっている「豊後高田市観光まちづくり株式会社」、団体客と個人客の双方を迎え入れるための駐車場などが立地している。

我われが「昭和ロマン蔵」の建造物を観察していると、あらかじめガイドをお願いしていた「昭和の町」案内人の井上恭一氏が来られ、そこからの説明をお願いした。最初は「昭和の町」の概略から始まり、「昭和ロマン蔵」を構成する建造物群、これから巡るコースの説明が続いた（図2）。質問を投げ掛けつつ話を進める井上氏の絶妙な話術に我われは徐々に引き込まれていった。「昭和の町」案内人は現在5名が登録されており、男性2名（元・航空管制官：1、会社員：1）と女性3名（元・バスガイド：2名、主婦：1名）の陣容らしい。

「昭和の町」に足を踏み入れた我われ一行は、井上氏に導かれて数店舗の店内を見学し、そこで販売されている商品、「一店一宝」のコンセプトのもとで各店が用意した店や家の「お宝」について見聞した。ここでも各店舗内で質疑を交えての様々な解説があり、全く退屈することなく時間がすぐに過ぎた（図3・図4）。こうした解説は極めて意義深く、通りすがりで「昭和の町」を見ただけでは決して気付かないものばかりである。店や商品の説明だけでなく店主や店員との会話で「昭和の町」の人情にまで迫ることができる。後述する受講生のレポートでも、案内人制度や商店街の人々との交流など、ソフト面を高く評価する回答が多く寄せられた。

「昭和の町」でのミニエクスカッションを終えて、我われは「昭和ロマン蔵」に戻り、その一画の「昭和の夢町三丁目館」内に設けられた「昭和夢町小学校」でレクチャーを受けた。教室は、郷愁を感じさせる雰囲気満ちており、ここで「昭和の町」の解説を受けることはこの上ない贅沢である（図5）。レクチャーでは豊後高田の概況から説明が始まり、「昭和の町」の誕生に至る経緯が語られた。その要旨を記すと次のようになる。



図2 「昭和ロマン蔵」での井上恭一氏による説明
クイズ形式で質疑を繰り出した楽しい説明に惹き込まれる。（2015年8月24日、香川貴志撮影）



図3 「千嶋茶舗」で茶の保管や販売の方法を聴く
京都にゆかりが深い茶の販売にも多くの工夫が秘められていることに驚く。

（2015年8月24日、香川貴志撮影）



図4 「森川豊国堂」「高田テント工場」にみる建築再生
昭和の雰囲気を伝える看板は再生されたもので、店の前の自転車は配達に使われていた「一店一宝」である。
(2015年8月24日、香川貴志撮影)



図5 「昭和夢町小学校」の教室でのレクチャーの様子
懐かしさ漂う教室で「昭和の町」の町づくりを学ぶ。
何とも贅沢な時間が流れる。
(2015年8月24日、香川貴志撮影)

「昭和の町」の発案は、豊後高田の商店街が時代の流れから取り残され、期せずして昭和の雰囲気を留めていたことに起因する。近世にあたる江戸、近代以降の明治や大正はすでに他地域で実績があり、二番煎じをしても集客は見込めない。そこで「すでに存在しているものを最大限活用する」という方針のもと、1992（平成4）年に策定された商業活性化構想を棄てて、1996（平成8）年に中心市街地の建造物をつぶさに調査する「ストリート・ストーリー」プロジェクトが始められた。この調査結果を受けて、事業方針を定めて賛同する店舗を募り、2001（平成13）年に昭和30年代をテーマにした「昭和の町」のオープンにこぎつけた。この間の経緯については、香川（2016）で整理した文献の他、豊後高田商工会議所（2004）にも年譜的かつ抒情的な記述を見出せる。

上述の事業方針では「4つの再生」が示された。それは、①建築再生（外観・建築、および看板）、②歴史再生（一店一宝）、③商品再生（一店一品）、④商人再生（経営者）の4点である。こうした取り組みの甲斐あってか、2001年には約25,000人の観光客を集めた。当初の事業費は約2,100万円で、県・市・地元（個人）がおおよそ1/3ずつを負担した（豊後高田市商工観光課資料「昭和の町について」による）。その後の諸事業においても県と市は多くの事業で資金提供を行って現在に至っている（同）。訪問した観光客の数は、2011（平成23）年には約401,000人にも達した。ごく近年は高止まりの傾向にあるものの、予想以上の来客が得られたことは間違いない。今後は、昭和を体感し記憶している世代の最若年層が2015年現在で30歳前後であることから、海外旅行への志向も強い世代をいかにして惹き付けるのか、その工夫の成否が「昭和の町」の将来を決定付けよう。

レクチャーの最後には質疑の時間が設けられ、受講生からも多くの質問が出され、それぞれに納得のいく回答が得られた。主な質疑応答を列挙すると次のようになる。

Q1 「昭和の町」のための年間予算の上限はいくらか？

A1 予算自体に限りがあるが、特段に上限は設定しておらず議会で審議して決めている。

Q2 店舗の後継者の他に問題となっていることはあるか？

A2 個人客の比率が高くなってきているので、いかに町の中で消費してもらうかが目下の課題だと思う。

Q3 蕎麦屋を支援しているのはなぜか？

A3 転作で栽培される蕎麦の活用を支援するため、観光まちづくり株式会社で専門店を認定している。

Q4 団体客を増やすための対策は？

A4 Webサイトの充実、イベント開催、宿泊施設整備への努力、県内の別の観光地との連携などを行っている。

Q5 施設運営における後継者問題はありますか？

A5 積極的に若い人たちを採用して職員の高齢化を未然に防ぐ努力をしている。

Q6 案内人制度における案内人はどのようにして選んでいるのか？

A6 ボランティアを募集して試験を経て採用している。分野は海・山・町の三領域。8割の得点で合格となる。

レクチャーは13時過ぎに終了した。一同でお礼を述べてから「昭和ロマン蔵」の中庭で初日に与えた課題（後述）を再確認し、遅くとも17時30分には宿舎に戻るよう指示（別宿舎での宿泊となった男子学生も同様に自身

の宿舎に戻るよう指示)して、それ以降はフィールドでの自由観察とした。昼食は全員が済ませていなかったため、これも各自で摂るように伝えた。次章にまとめるレポートの内容から判断して、受講生はそれぞれ「昭和の町」の魅力や課題を見出し、意外な発見に驚いた者もいたようである。

受講生がフィールドに散った後、筆者(香川)は豊後高田市立図書館に赴き、そこで小学校中学年の社会科副読本『私たちの豊後高田市』(豊後高田市教育委員会 1994、1999、2005)の記述内容を経年的に調べた。最新版の『私たちの豊後高田市』(豊後高田市教育委員会 2010)は市立図書館に収蔵されていなかったため、館内のカウンターで豊後高田市教育委員会を紹介してもらい、図書館から電話連絡をして後日大学まで郵送してもらうことにした。これらの副読本において豊後高田市の商店街に関する記述を調べてみると、「昭和の町」がオープンする2年前に発行された1999年版までは、当然ながら「昭和の町」の実現に向けた取り組みは全く記されていない。先述した「ストリート・ストーリー」の調査は1996年に始まっているが、これに関する記述がみられないのは、「小学校では難しい」という判断が働いたのか、あるいは調査が専門的で一部の関係者にしか認知されていなかったかのいずれかであろう。なお、2005年版と2010年版を比較すると、現在「昭和の町」となった過去の商店街の様子について、「だんだんとお客さんが少なくなっていました」との記述が2010年版で加筆されるなど、わずかながらも変化している様子を読み取れる。この微妙な変化は、まちづくりの成功をバックボーンとした、過去の「負の状態」を客観視できる自信に依拠していると考えられる。

夕食は反省会を兼ねた恒例の打ち上げコンパであったが、受講生の多くが「昭和の町」の温かさを実感したようで、「是非とも再訪したい」という意見も漏れ聞こえた。しかし、テレビの気象情報が間断なく報じる台風情報は、従来の授業では経験したことのない危機の接近を予感させ、凶らずも落ち着いたコンパとなった。

3. 実習3日目(豊後高田市の天候:雨ときどき曇、日中の最高気温:29.8℃(11:00))

前日の夜の気象情報で「九州を縦断の見込み」と告げられていた台風が豊後高田をほぼ直撃し、午前6時前後に瞬間最大風速が毎秒30mを超えた。テレビのニュースでも公共交通機関の全面ストップが報じられており、朝食は予定通り済ませたものの宿舎から身動きできない状態となった。外に出るのは危険であるため、受講生全員に宿舎に留まって外出を控えるよう命じ、あらかじめ配布していた原稿用紙を使って部屋で事後教育課題の作成に励むように指示した。蕎麦アレルギーのため別宿舎で宿泊していた男子学生1名についても、これと同じ指示を電話で済ませておいた。午前9時過ぎから風が少し弱くなり始め、10時がチェックアウトタイムであった別宿舎の男子学生が10時過ぎに宿舎まで移動してきた。この時点で、既に別府方面に移動するのは諦めて、今回の現地実習は豊後高田で解散ということを受けざるを得なかった。大学からは我われを心配するCメールが副学長より届いた。こちらからは安全確保を最優先に行動することを約束し、全員が無事であることを返信した。

その後は宿舎の女将さん、蕎麦職人でもある息子さんの協力を仰ぎつつ交通情報の収集に努めたが、14時にバスの運行がようやく再開されるとの情報が得られたに過ぎなかった。ただ、翌日からの予定がある学生もあり、山陽新幹線が18時頃から運転再開との情報が届いたため、バスの時刻を確認してから全員で宿舎を15時に発った。台風直撃という非常事態とはいえ、滞留を快く引き受けてくれた宿舎のご厚意は本当にありがたかった。

豊後高田BTで、我われ一行は別府方面への移動を希望する者8名と北九州・京都方面へ急ぐ7名(筆者を含む)に分かれ、各々の移動を開始した。前者のグループは宇佐駅前でレンタカーを借りて別府へ移動(うち1名の大学院生は豊後高田に戻った)、後者のグループは宇佐駅よりも上り列車が多い柳ヶ浦駅で日豊本線の運転再開を待ったがそれが叶わず、しびれを切らした受講生6名はジャンボタクシーで小倉駅に向かった。筆者は豊後高田に引き返し、ビジネスホテルに投宿した。なぜなら、成績報告の期限が切迫(既に期限は過ぎていたが現地実習の日程との関係で特別に延長を依頼)しており、提出されたレポートを評価する必要があったためである。

かくして今回の現地実習は予期せぬトラブルで幕を閉じた。別府駅周辺でのエクスカッションができなかったのは残念であるが、受講生全員が別府に関する何らかの論文要旨を最低1編はまとめているので、そのアウトラインを少しは理解できているはずである。不本意な幕引きとなった現地実習とはいえ、安全確保を最優先した行動は決して恥ずべきことではなく、受講生諸君が教壇に立った時に同様の事態に遭遇すれば今回の経験が必ずや役立つと考えている。

IV. 事後教育レポートの内容と評価—結びに代えて—

前章の3で触れたように、今回は成績提出の期限が切迫していたため、宿舎での滞留を余儀なくされた最終日の午前中を活用して事後教育レポートを仕上げさせた。もとより、レポートは別府での解散時に提出させる予定で原稿用紙を受講生各自に配布していたが、レポートをまとめる時間枠を十二分に取れたことは不幸中の幸いであった。

与えた課題は次の3点である。

【課題1】集客の面から「門司港レトロ」の魅力を一層高めるための方策を提案し、それが主にどういう客層にアピールできるのかについて、181～200字でまとめてください。

【課題2】豊後高田「昭和の町」で最も印象に残った店舗を記し、どういう点が印象に残ったのかについて 141～160字でまとめてください。

【課題3】豊後高田での全体行動の際、「最も良い」と感じたものとその理由、「最も改善の余地がある」と感じたものとその理由ならびに改善方策を 181～200字でまとめてください。

字数について下限と上限の双方を設けているのは、限られた条件の中で自身の考えをまとめることが散文的なレポートをまとめるよりも格段に難しいからである。また、400字詰原稿用紙で1行の多寡が問題となる中でのレポート作成は、受講生が教壇に立った際の学級新聞・学年新聞の作成に役立つという理由もある。上記の課題は、すべて現状の表面的な観察だけでは仕上げることができず、提案や判断の裏付け（課題1、課題3）、根拠の説明（課題2）などが必要ないように設計したものである。

1. 課題1「門司港レトロ地区の魅力を高めるための方策」についての回答の分析

この課題は、2日目朝に豊後高田で現地合流した受講生を除く13名から回答を得た。しかし、改善方策の提案から、それがターゲットとすべき客層まですつなく説明できた回答は少なく、多くは現状の問題点とその解決・改善案の提案に留まっていた。限られた字数で表現することの難しさがうかがえる。

得られた回答は複数の提案や指摘をしているものもあるので、その合計は16となり回答人数には合致しない。回答内容を数が多い順に整理すると次の6点に集約できる。

- ①外国人観光客が少ないので、外国語表記を充実させ、外国語でのボランティアガイドを拡充する【5回答】。
- ②散在している諸施設相互間のアクセスが悪いので、周回バスなどでアクセス改善を図る【4回答】。
- ③雰囲気優先も悪くはないが歴史をより深く学べるような工夫も必要【3回答】。
- ④子供や家族連れでも楽しめる施設やイベントをより工夫する【2回答】。
- ⑤子供や家族連れが多いので若者に一層アピールできる施設やイベントが必要【1回答】。
- ⑥歴史的な建造物が飲食店に使われると内部を自由に見学できないのは問題【1回答】。

以上に整理した①～⑥の各々について、若干の解説を加える。まず①については、若干の観察不足が指摘できる。すなわち、アジア系の外国人観光客を判別できていないという問題である。筆者は自由行動に任せた時間に地区内の各所を巡ったが、そこでは多くの中国人団体客に出会った。ある施設での聴き取りによると、韓国からの訪問客も増えているようなので、人物を観察する際は外見だけでなく会話（サウンドスケープ＝音風景）にも注意を払っておく必要があろう。②に関しては、受講生がアクティブに行動していた証左と解釈できる。確かに関門橋あたりまでをトータルで考えると交通アクセスの問題を指摘せざるを得ないが、中心部だけをコンパクトにみればバリアフリーやユニバーサルデザインの水準は比較的高いように感じられる。③については、受講生全員が社会領域（学部）と社会科教育専修（大学院）であるため、必然的に導き出された改善点であろう。一般の観光客は詳しくすぎる説明を嫌うケースも珍しくないで、程度を見極めるのが難しいかもしれない。

④は⑤と相反するが、筆者が観察したところ、当地区の中心的なターゲットはカップルや団体客で、相対的に子供連れや家族単位での行動はメインターゲットではない。多様な客層にアピールできる地域計画は総花的にな

ってしまう危険も併せ持っている、「空間的な住み分け」を意識する計画が望まれる。⑥に関しては、すべてが博物館になってしまうと逆に単調さを助長する恐れがあるので、歴史的建造物が飲食店に利用されるのは決して悪いことではない。地区内にある図書館の例のように、建物の一部は自由に出入りできるのが理想であろう。

2. 「昭和の町」で印象に残った店舗とその理由

受講生全員から14件の回答を得た。うち3店舗が2票を集め、他は散票状態で1票ずつだった。2票を集めた店舗を50音順に列举すると、①ウエガキ薬局、②金岡（精肉店）、③佐田屋（駄菓子・おもちゃ）となる。

①を挙げた理由として『『首から上の薬』¹⁾などユニークな名称の薬』との商品に対する感銘、「ドラッグストアに客が流れて正直いって経営は苦しい」という、象徴的な店舗にしては意外な店主の話が指摘された。まちづくりの光と影が垣間見えており、地域振興の難しさを実感できる。

②では、2票とも「観光客だけでなく地元客へのサービスも忘れない営業スタイル」を指摘していた。精肉店は商業地理学的な店舗分類では最寄品店²⁾に分類されるので当然のことなのかもしれないが、観光地化された場所の旧来の店舗が本来の良さを喪失していくケースは決して珍しく無いため、幅広い客層から支持される営業スタイルは他地域でも広く模範となる。

③では、経営者の人柄が「店と客」だけでなく「客と客」をもつないでいる様子、さらに地元の小学生が多く出入りするという話に対する感銘が記されていた。これは「昭和の町」の事業方針の一つである「商人再生」が具現化されたものとして高く評価できる。

各々1票を集めた店舗(施設)を50音順に列举すると④アルフォンソ（ベーカリー）、⑤こうこう屋（漬物店）、⑥雑貨商・古美屋、⑦雑貨屋・悠遊館、⑧昭和ロマン蔵、⑨千嶋茶舗、⑩伯刺西爾（喫茶・軽食）、⑪森川豊国堂（菓子店）、以上の8店舗である。ここの店舗や施設について様々な選出理由が示されていたが、紙幅の都合もあるので個々には触れない。全体的な傾向としては「店舗の内外装」、「珍しい『お宝』の展示」、「商品のユニークさや懐かしさ」、「経営者の温か味のある接客」、が多く指摘された。これらは、「昭和の町」の事業方針としての建築再生（外観・建築、および看板）、歴史再生（一店一宝）、商品再生（一店一品）、商人再生（経営者）を体現したものであり、まちづくりの狙いが訪問者へ確実に浸透していることが分かる。

3. 豊後高田での全体行動の際に「最も良い」および「改善の余地がある」と感じたものと各々の理由

まず「最も良い」という評価を受けたものとその理由について考察する。評価されたものをグループ化すると、①近年の流行語にもなっている「おもてなし」に関連するソフト面が9票、②主にハード面に分類される修景³⁾に関わるものが3票、③ソフト面とハード面の中間に分類できる店舗の特徴づくりに関するものが2票、以上3種のカテゴリーに分けられる。

①では、我われも利用した観光ボランティアの御案内人制度が7票、そして①商店街の経営者たちの温かさが2票を数えた。いずれも人の力が基盤となった取り組みの成果であり、「親しみやすさ」、「分かりやすさ」、「温か味」が評価理由になっている。まちづくりに多額の資本をかけずにすむボトムアップ的な部分が評価されているのは注目すべき点である。バブル崩壊後に企画された「昭和の町」だからこそ実現できた「背伸びをしない」取り組みは、他地域でもすぐに採用できる汎用性に優れたものである。

②では、各回答に共通して、看板や景観の再現性、無理矢理に統一性を図っていない自由裁量もたらす昭和の雰囲気、昭和を知らなくてもそれが理解できる商店街づくりなど、具体的な取り組みを指摘する記述が確認できた。視覚的な分かりやすさは案内人を依頼しなくともアウトラインが理解できるものであり、これについても修景計画さえ盤石であれば他地域でも実現は難しくなく、汎用性が高い取り組みであるといえる。

③では、2票とも「一店一宝」のユニークさを評価していた。いわゆるガラクタを展示品に高める発想は独創的で、多額の費用をかけない方針が貫かれている。以上の①～③に共通してコストパフォーマンスの高さが際立っており、今後のまちづくりに関する多くのヒントが「昭和の町」に内包されていると評価できる。

次に「改善の余地がある」と判断されたものとその理由について考察する。回答内容をカテゴリー分けして、それを数の多い順に並べると、①御案内人制度（6票）、②未整備店または未整備点の残存（4票）、③休日設定（2票）、④団体客の減少（2票）、以上の4つに分類できる。

①については、「制度は非常に評価できるものの、案内人を依頼しなければ『昭和の町』の良さが理解できない」という趣旨の回答が4票、「案内人の後継者育成が心配」が2票あった。案内人は案内をしてもらう側が一人あたり200円の料金でお願いできるため、この制度が「最も評価できる」で最多数の票を得たことから判断しても価値ある制度であると考えられる。しかし「依頼方法をもう少し分かりやすく簡単に」、「あらかじめ依頼していなくても当日お願いできるのが理想」という意見も寄せられた。後継者育成の問題ともあわせて、これらは人材確保が不可欠な課題でもあるので、必要性が高くても多くの障害が予想され即座の実現は困難ではないかと思われる。

②は、店に関する指摘が3票、道案内についての指摘が1票あった。前者では「未整備店も多く残存」、「一店一宝が相互比較できればもっと良い」、「目的別に店舗を探しにくい」という意見が各1票、後者では「路地もあるので道に迷いやすい」という指摘が得られた。これらのうち未整備店残存の問題は経営者の意識も絡んでくるため一筋縄では運ばないだろうが、残りの3つについては案内地図の改善で十分に対応できるので、今後の善処に期待したい。

③に関しては、「経営者が楽なように土日祝にも店舗休業日を設ける」、「不定休の店は利用しにくい」という指摘が各1点届いた。前者は観光客の来街が週末に多いため難しいと思われるが、不定休については「平日の指定休業日＋臨時休業」でも利用者は理解できるので早期の改善が望まれる。

④で指摘された「団体客の減少」は、企業や各種団体での経費節減の影響を鑑みると、いずれこの観光地でも同じ悩みを抱えている。団体客に比べて個人客は、迎える側（受け入れ観光地側）からすれば来客一人当たりの経費が高くなるため、そのコスト増への対応が急務であろう。第Ⅲ章2節にも記したレクチャーによると、個人客であれば来客一人あたり約100円のコストを要するとのことであった。

4. 成績評価を含めた全体総括

少人数クラスでは、どうしても成績評価が甘くなってしまうがちであるが、ここ数年は現地行動での積極性や協調性、事前学習（論文要旨についての発表や記載内容）や事後学習（レポート）の仕上がりを総合して厳格な成績評価を心掛けており、今回もその方針で成績評価を行った。今回は学部の受講生が13名（うち6回生と2回生が各1名）、大学院の受講生が1名だったため、個人が特定されることを避けて、本稿では学年別の成績開示をしない。すべての受講生の成績評価の内訳は、秀（90点以上）：2名、優（80～89点）：8名、良（70～79点）：2名、可（60～69点）：2名、不可（59点以下）：0名である。

今回の現地実習は、台風直撃によって最終日の行程を大幅に変更せざるを得なかったが、その時間を活用して事後教育レポートの作成をさせたため、それがレポート内容の充実に寄与したと思われる（当初の予定では、2日目の夜及び最終日の朝にレポート作成をさせる予定だった）。例年は解散後に1週間弱の猶予を設けてレポートをEメール添付で提出させていたが、今回のように原稿用紙を配布する方法も悪くないと感じた。ただ、当科目は前期集中科目であるため、成績提出までの期間が大変に短くなってしまうことが多い。また、教務課に成績提出の締切り期限を特別延長してもらうなどの措置を要することもある。

奇数年開講の当授業科目、偶数年開講の「地理学特講」を8月上旬に実施できれば、こうした問題は解消できる。しかし、前期試験が8月上旬にまで及び、その頃に筆者も担当者である免許認定講習会や免許更新講習会が同時並行的に実施される昨今のカレンダーからすれば、旅費が高騰する盆休み前後を避けると、当科目は必然的に8月下旬の実施となる。このような実施時期の問題も含め、たとえ経験を重ねても授業実施に関わる改善の余地が不断に生じる。あらゆる事態に臨機応変で適切な対応ができるよう、今後も様々な経験を蓄積していく所存である。

謝 辞

本授業科目の実施、および本稿の作成にあたって、JR九州門司港駅の皆様、九州鉄道記念館の皆様、豊後高田商工会議所事務局長の北崎義幸様、豊後高田市商工観光課商工労政課長の持山弘太様、豊後高田市観光まちづくり株式会社常務取締役の栗原茂彦様、同・営業マネージャーの河野 聡様、同・観光ボランティアガイドの井上

恭一様、豊後高田市立図書館と豊後高田市教育委員会の皆様、「昭和の町」各店舗の皆様、旅館「平清水」の皆様、以上の方々にひとかたならぬご厚情を賜りました。末筆ながら、ここに記して心より御礼申し上げます。

注

- 1) 我われ一行の案内人を務めてくださった井上恭一氏の説明によると、「首から上の薬」というのは便秘薬の商品名である。便秘に悩む女性が店頭で便秘薬を求める際に恥ずかしくないよう、頭痛薬を所望しているかのよう聞こえる商品名が考案されたという。
- 2) 最も近い、あるいはそれに準じる店舗で購入することが合理的であると考えられる商品を主に扱う店舗のことで、精肉店、豆腐店などに代表される飲食料点小売店が好例である。ただ、ショッピングセンター、スーパーマーケットやディスカウントストアとの競争により苦境に立たされている最寄品店も珍しくない。
- 3) 都市計画や地域計画、環境アセスメントなどで多用される用語で、もともとある地域の特徴や雰囲気を破壊しないように工夫しながら景観を整備（補修・創出を問わず）していく技法を指す。

参 考 文 献

- *事前学習会で扱った対象地域に関わる60編の文献については、香川（2016）を参照のこと。
- 豊後高田市教育委員会（1994）『私たちの豊後高田市』, pp. 12-21.
- 豊後高田市教育委員会（1999）『私たちの豊後高田市』, pp. 12-21.
- 豊後高田市教育委員会（2005）『私たちの豊後高田市』, pp. 13-17.
- 豊後高田市教育委員会（2010）『私たちの豊後高田市』, pp. 13-17.
- 豊後高田市商工会議所（2004）『豊後高田商工会議所創立50周年記念誌』, pp.50-63.
- 香川貴志（2007）「長崎ば、さるかんねー平成18（2006）年度「地理学特講（地理学臨地実習）」「地域環境学臨地実習」の覚え書きー」, 京都教育大学教育実践研究紀要, 7, pp. 1-10.
- 香川貴志（2013）「義務教育で重視される項目をたどる北東北〜道南フィールドトリップー2012（平成24）年度「地理学特講」の覚え書きー」, 京都教育大学教育実践研究紀要, 13, pp. 11-21.
- 香川貴志（2015a）「阪神・淡路大震災の被災地の現在を歩くー震災20周年を前にした2014（平成26）年度「地理学特講」の覚え書きー」, 京都教育大学教育実践研究紀要, 15, pp. 21-31.
- 香川貴志（2015b）「阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第1報）」, 京都教育大学環境教育研究年報, 23, pp. 7-15.
- 香川貴志（2015c）「阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第2報）」, 京都教育大学環境教育研究年報, 23, pp. 17-25.
- 香川貴志（2015d）「バンクーバーで住宅地の変化を調べる」, 地理, 60-9, pp. 21-27.
- 香川貴志（2016）「懐かしさを感じさせる街を歩くための事前学習の記録ー門司港レトロ、豊後高田「昭和の町」、別府温泉郷を事例地域としてー」, 京都教育大学環境教育研究年報, 24, pp. 1-14.